

Title	ニュー・ハーモニーの現状
Sub Title	Present state of New Harmony
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.5 (1975. 5) ,p.468(56)- 477(65)
JaLC DOI	10.14991/001.19750501-0056
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750501-0056

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ニュー・ハーモニーの現状

白井厚

1

筆者はかつて本誌において Robert Owen のアメリカ⁽¹⁾における New Harmony の共同体実験について触れ、それはわずか3年で挫折したとは言え、第1に、彼の理想の最大限の実践であり、彼の活動の転機、かつ頂点を示すこと、第2に、おそらく世界で最初の非宗教的共同体の実験であり、その後に見れる多くの共同体運動の先駆であること、第3に、これはアメリカの歴史に大きな影響を与え、彼の子孫やオウエン主義者を通じて、オウエンの名はアメリカにおける多くの社会改良や解放運動と結びついていることを指摘した。1825年4月から1828年4月に至るニュー・ハーモニーの実験は、その前に Rappites (Harmonists と呼ばれる) による10年の共同体前史があり、また以後150年に及ぶ後史が連綿と今日まで続いている。ニュー・ハーモニーは、決して単に一場の夢の跡ではなく、この長い期間を通じて、アメリカ文化の一中心なのである。

今回の渡米の目的の一つは、ニュー・ハーモニー訪問にあったので、世界で最初につくられたという日本のロバート・オウエン協会の会長五島茂教授から紹介状を貰ってくるはずであったが、それが間に合わぬうちに離日してしまった私は、とりあえずニュー・ハーモニーの Visitor Information Center に手紙を書き、妻子と共にかの地を訪問したい旨連絡した。幸いにもこの手紙はオウエン一族の一人 Kenneth Dale Owen 夫人に回送され、彼女は、日本のロバート・オウエン協会や、日本人のニュー・ハーモニーに対する関心が強いことを知っており、歓迎するとの返事を得た。彼女はオウエンの曾孫の夫人で、テキサス州ヒューストン

に住み、Blaffer Trust (財団) の所有者。この財団はニュー・ハーモニーの歴史的な土地・建物を買収・管理しているし、彼女個人もいくつかの建物を所有、また多額の寄付をしているので、彼女は単にオウエン一族の一人というだけでなく、現在のニュー・ハーモニーのパトロンである。そこで早速日程などを打ち合わせ、1974年8月18日からかの地に3泊することとした。

私の住むヴァージニア州 Charlottesville から見ると、インディアナ州ニュー・ハーモニーは丁度真西に当り、直線距離にすれば約500マイル強、インディアナ州の辺境 Wabash 河のほとりにある小村だが、予定されている国道64号線が完成していれば、極めて簡単な道である。だがこの道がまだごく部分的にしか通じていないため、やむなく狭い旧道を羊腸のごとくたどってアパラチア山脈に挑み、ウエスト・ヴァージニア州へまが抜けなければならない。余裕を取って途中2泊の計画をつくり、8月16日、車でシャーロットツヴィルを後にした。

南北戦争の英雄 Robert E. Lee, Thomas J. "Stonewall" Jackson が眠る Lexington を経て、ウエスト・ヴァージニア州に入り、山中の古いホテルの主からこの州には奴隷がいなかったというような自慢話を聞いた。Blue Grass 地域として知られたケンタッキー州の大牧場で目を楽しませたりしながら、ケンタッキーの Lexington, Louisville を通って、予定通り18日夕刻に念願のニュー・ハーモニー着。ニュー・ハーモニーに近づく頃から、次第に付近の村は田舎臭さを増してきたので、今も人口僅かに1,000人弱というニュー・ハーモニーもかかる寒村の一つと化したかと思いきや、こつ然と林の中に現れたこの夢の村は、整然たる街並とよく手入れされた古い建築物を有し、数々の史跡の間

注(1) 拙稿「アメリカにおけるオウエンとオウエン主義者たち——オウエン生誕200年に寄せて——」(「三田学会雑誌」64巻9号, 1971年9月)

に咲き誇る花に囲まれ、地上の理想郷の名に恥じぬたずまいを示していた。村を一巡してのち、中心部に近く赤いジェラニウムの咲くレストランで、かねての手筈に従い Pete Webster 氏に会う。彼はこの村における経営者の一人で、大きなお腹をゆすって笑う好人物。以後われわれの滞在中の一切の接待を担当してくれた。ひなには稀な美味の御馳走にあずかり、われわれの宿として、ラップ時代に建てられた“Poet's House”と言うロマンス漂う広い庭つきの家を提供してもらう。

2

現在のニュー・ハーモニーの建設は、1814年 Johann Georg Rapp (1757~1847) とその一派の手に始まる。ラップは西南ドイツの Württemberg にぶどうづくりの農民の子として生まれ、強力な宗教指導者で、「聖書」を独自に解釈、パレスチナにキリストが再臨し至福一千年 (millennium) がすぐにも開始されることを信じ、⁽²⁾ その準備を訴えて、大きな影響を与えた。そしてルーテル派の権威主義に反逆し、国家と既成教会からの干渉を逃れ、キリスト再来の日を汚れなき新天地で迎えるために、またナポレオン侵攻の恐れもあって、1803年アメリカに渡る。そして1805年、約700人の同志と共に、当時まだ新開地であったペンシルヴェニア州 Butler 郡の約3,000エイカの土地に Harmonie

と呼ばれる共同体を建設、ラップと Associates の間には契約が結ばれた。この契約によって、ラップは原始キリスト教的な共産主義社会を組織、また1807年には任意の独身主義もとりいれ、養子の Frederick Rapp と協力してその建設に成功し、10年後には更に広大な土地を求め、前の土地を10万ドルで売って、水運の便のよい Wabash 河畔に 25,000エイカの新たな約束の地を6万ドルで得て移動した。数年後に更に土地を買ひ足して3万エイカとなり、これが今のニュー・ハーモニーの地で、ここでも厳格な共産主義を実行、木を切り沼を埋め、畑をつくり家畜を育て、疫病と闘いつつ大きな努力によって開拓に成功している。成功の理由は、強い信仰心と優れた経営、ドイツから多くの熟練職人を連れてきたことなどによるだろう。彼らは街を計画的に建設、工場を建て蒸気機関を用いて生産し、品質の優れた余剰物資 (肉、穀類、織物、麻布、屋根板、ロープ、砂糖、ウイスキー、帽子、靴、牛などは、遠く大西洋岸やニュー・オーリアンズにまで売られた。フレデリックの才能は政治の面にまで発揮され、ニュー・ハーモニーは有数の村になっていたために、1816年にはインディアナ州の憲法制定会議議員となって活躍、通貨の安定、産業振興、交通整備などに貢献している。インディアナにおけるハーモニーの建設に奇蹟的とも言える成功を取めたラップは、10年後に再びペンシルヴェニア⁽³⁾ に移住して Economy という共同体を築

注(2) キリスト再来の約束は、「ヨハネの黙示録」に示される。「また私が見ていると、一人の天使が、底知れぬ場所の鍵と大きな鎖を手にして天から下ってきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわちかの年経たぬ蛇を捕え、それを千年の間縛りつけ、底知れぬ場所に投げ込み、閉じ込めて封印し、千年の期間が終るまでは諸国民をこれ以上欺かぬようにした。……また見ていると、数多くの座があり、その上に人びとが坐っていた。そして、彼らに裁きの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人びとの霊がそこにあり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人びとがいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間支配した。」(第20章)

(3) イコノミイという名前は、ラップの言“A divine harmony within a divine economy” からきているが、新しい共同体の現実的な性格を表している。これもまたヨーロッパ人の注目をひき、その一人 Friedrich List は、1825~32年にかけてアメリカに追放されている間にイコノミイの近くに農場を買い、そこからラップを訪ね、「農地制度論」の中で次のように記している。“こういう計画的な入植は、最初から大きい障害にぶつかる。すなわち、完全な植民団体をつくるのに必要な、諸力の多様性と諸精神の調和とは、これを求めることが極めて困難であるのみならず、それが見いだされたのちにあっても、移住の途上と新しい入植地の建設とにあたって、これを結合させておくことは、それよりもはるかに困難だからである。それでもこれが不可能でないことは、ヴェルツェンベルク出の植民引率者であるラップやハラヤボイムラーが示したところであるし、ヘルンフォート教団の人々が示したところもこれに劣らない。またこの試みの成功によって、こういう方法による植民についてわれわれの確約した諸利益が妄想ではなかったことの、さかいらいがたい証明が与えられたのである。これらの移住によって、文化はまるでなにかいっそう高い力によるもののように荒野のただなかに運び込まれ、しかもそれは、今なおいたるところで、その地方全体の驚嘆の的となっているのである。”*Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung*, 1842, 小林昇訳, 岩波文庫, 132ページ。リストはここで、ドイツ人は共同社会の本を一冊も書かぬがこれを実践していると言い、共同社会維持の困難を克服する力の根元は宗教であると述べて、ラップが旅行と定住の費用を祈禱と説教によって生み出した状態を描いている。ラップの三つの共同体は、その特殊な性格、継続的な成功せる共産主義、ドイツ人によるアメリカ移民など、いろいろな面と興

き、これは1847年ラップの死まで、また部分的にはその後も1905年まで存続した。

オウエンはこのハーモニーの土地・建物を購入し、その名を New Harmony と改め、入村者を募り、自分の理想を実現しようと早急に共産主義を試みたが結局失敗し、わずか3年の後にイギリスに帰る。その経過は前稿で述べたのでここでは省略するが、そこで触れたように、オウエンの子供たちと、William Maclure, Gerard Troost, Thomas Say, Charles A. Lesueur, Joseph Neef たちの人材は、この地に残った。そしてオウエンの子供 Robert Dale Owen は政界にも活躍し、William Owen は演劇に貢献し、David Dale Owen は地質学を研究し、Richard Owen は地理学者となり、マクリューアによって教育が普及、Francis Wright によって女性の解放が進んだ。特に自然科学研究においては多くの科学者が集まり、その文化の高さによって来訪者を驚かせている。Workingmen's Institute 設立、劇場開設、Minerva Society 結成、地質学研究所設立などは、いずれもこうした気運の現れで、20世紀に入ると、これらの貴重

な建物や資料を保存する企てが始められ、1939年に、インディアナ州の歴史家 Ross F. Lockridge らの努力で New Harmony Memorial Commission が創立され、この委員会がいくつかの残った建物を購入、またいくつかの土地は州の所有となった。1953年にこの委員会は解散し、以後その財産はすべて州の Indiana Department of Conservation の管理下にある。われわれを招待してくれたケニス・デイル・オウエン夫人も多くの歴史的建物の所有者で、村の保存に大きな貢献をしているし、その他州やいくつかの団体や個人が、その維持に努力している。

さらに1964年10月には、ニュー・ハーモニーに対する認識を深め、その文化を發展させ、施設を改善し、またその資金を調達するために、Harmonie Associates が結成された(会長 John Elliott)。これはラップ時代の名前を継いだものであり、またこの年は丁度ラップによる村の建設から150年目に当るため、その記念事業も行なわれたようである。

1971年はオウエン生誕200年のため、イギリス、ア

ニュー・ハーモニー関係年表

1757	George Rapp 生まれる。	1853~8	Robert Dale Owen, ナポリ王国駐在大使。
1771	Robert Owen 生まれる。	1857	Dormitory No. 4 を劇場に改装。
1803	Rappites, アメリカへ渡る。	1859	Owen Laboratory 建設。
1805 Feb. 15	Harmonie 建設。	Oct. 20	Minerva Society 結成。
1807	独身制導入。	1861	南北戦争開始。
1814 May	インディアナに移住決定。	1863 Sept. 28	Minerva Society, 南北戦争により消滅。
1815	春に移住完了。	1894	Workingmen's Institute 新築。
1816	インディアナ, 州となる。	1913	Murphy Auditorium 建設。
1824	Economy へ移住。	1919	Indiana Federation of Woman's Club, Old Fauntleroy Home を購入。
1825 Jan. 3	Owen, Harmonie を買収。	1939	Labyrinth 復元。New Harmony Memorial Commission 設立。
May 5	残留 Harmonists 100人の離村式。	1960	Roofless Church 建設。
Oct. 1	New Harmony Gazette 発刊。 Francis Wright, Female Social Society 結成。	1964 Oct.	Harmonie Associates 結成。
1826 Jan. 24	"Philanthropist" 号到着。	1971 Oct.	Owen 生誕200年記念会議。
1827	Thespian Society 設立。	1973 Nov.	Historic Communal Societies Conference.
1828 Jun. 22	Owen, 村と訣別。		
1836~8	Robert Dale Owen, 州議会議員。		
1838	Workingmen's Institute 設立。		
1843~7	Robert Dale Owen, 上院議員。		

味深いものがある。それは経済学者のみならず詩人の注目をひき、Goethe の「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」、Lenau の詩、Byron の「ドン・ジュアン」などにも触れられているという。Cf., Karl John Richard Arndt, *The Indiana Decade of George Rapp's Harmony Society: 1814-1824*, 1971, p. 12.

注(4) Cf., "New Harmony's Later History," *The New Harmony Movement*, by George B. Lockwood, 1905, in Dover edition, 1971, pp. 314-321.

メリカ、日本、セイロン、台湾、印度で記念行事が行なわれた。アメリカではニュー・ハーモニーの Thrall Opera House で、10月15、16日、インディアナ州立大学歴史学部と Harmonie Associates の共催で記念行事が行われ、アメリカの14州およびイギリスから、275名が出席した。その記録は、*Robert Owen's American Legacy, Proceedings of the Robert Owen Bicentennial Conference*, edited by Donald E. Pitzer, Indiana Historical Society, 1972 として出版されている。それによれば、15日はインディアナ州立大学歴史学教授 Donald Pitzer の挨拶、前インディアナ州知事 Roger D. Branigin の講演“ロバート・オウエンのニュー・ハーモニー。アメリカの一財産”、記録映画“New Harmony: An Example and a Beacon”上映、レセプション、16日はイギリス Sussex 大学歴史学教授 John F. C. Harrison の講演“ロバート・オウエンのアメリカにおける新道徳世界探求”、インディアナ州立大学歴史学教授 Robert G. Clouse の講演“ロバート・オウエンと至福千年説の伝統”、ニュー・ハーモニーの案内、Wisconsin 大学歴史学名誉教授 Merle Curti の講演“アメリカ思想におけるロバート・オウエン”、パネル討論“アメリカ思想に与えたロバート・オウエンの衝撃”、オウエンおよびオウエン主義者たちの子孫の紹介、音楽会、ダンスであって、ニュー・ハーモニーにおけるオウエンの事業、オウエンの思想とアメリカに対する衝撃を問題とした。この会議には、イギリスの200年記念協会会長 R. L. Marshall と、日本のロバート・オウエン協会の五島茂氏から、メッセージが寄せられている。

3.

われわれに提供された“詩人の家”は、ラップ時代の建築の一つで、広大な芝生の庭を持った二階家。素朴ながっしりとした建て方で、しかもその名の如く風

雅な姿を木立ちの中に示し、1階が広い居間、台所兼食堂、2階が寝室と浴室になっており、書棚には詩に関する本がぎっしりと並び、中には日本の建築などの写真集もいくつかある。建物の周囲には井戸や菜園や果樹園があり、家の中の家具調度品や大きな鉄の鍵はラップやオウエンの頃の生活をしのばせ、しかも台所設備や冷暖房は現代のもので、19世紀初頭の雰囲気の中で快適に過ごせるわけである。ラップ派の生活は、質朴そのものと思いきや、かなり豊かで、しかもフレデリックらの指導で芸術的であったと言えるだろう。火災の際の延焼を防ぐためもあって、多くの家は広い庭や果樹園を持ち、さながら荒野の中に現れた庭園の如き観を呈している。“詩人の家”の内部を観察すると、天井には、40cmほどの長さの木片に麦わらを巻きつけそれを土で固めた“Dutch Biscuits”と呼ばれるものがぎっしりと敷きつめてあり、これが防音、保温の役割を果たす。2階へ上る階段は広間の隅にあり、階段の途中に扉があって、保温とプライバシー保護の役割を果たす。その他暖炉の保温効果、夏の通風効果なども良く考えられており、自然条件の厳しさ⁽⁵⁾を克服するラップ派の技術を思わせるものがある。彼らは、居住した10年間に、1階家82軒、2階家34軒、寄宿舎4棟、教会2棟、学校2棟、倉庫、火酒蒸溜所、醸造所、工場、宿屋、図書館、医院、菜屋、製粉所など多くの建物を造ったわけだが、一つ一つ型の違う家が、部品を規格化した大量生産方式で建てられたそうだ。丸太小屋しかなかった地方に、煉瓦建て3階の寄宿舎を含め大きな家が立ち並んださまは、まさに壮観と言うべきであつたらう。そうした建物が、現在25軒残っており、また10軒が再建され、往時のおもかげを残している。

到着の翌19日、Red Geranium Bookstore で、ニュー・ハーモニー関係の書物で東京で入手しえなかったもの⁽⁶⁾を選んで買い求め、Ralph G. Schwarz 博士に史蹟を案

注(5) 詳しくは Don Blair, *Harmonist Construction*, Indiana Historical Society, 1964. プレミアによれば、ペンシルヴェニアの Harmonie 建築はドイツの様式と新大陸の建築技術の結合であるが、インディアナの Harmonie 建築は前の経験を生かして進歩し、豊かでもあったので、最も良い。Economy の建築は土地の人の手になったものが多いので、ドイツ人移民の町というよりは豊かなアメリカ人の町である。(Cf. p. 81)

(6) オウエンよりもラップ関係のものが多い。本稿に引用したもの以外に、Gladys L'Ashley Hoover, *Why The Harmonists*, Ohio River Frontier Series I. Hilda Adam Kring, *The Harmonist, A Folk-Cultural Approach*, 1973. John S. Duss, *The Harmonist, A Personal History*, 1943, reprint 1970. *Rappite Cookbook, Old Economy* のニューズ・レター *Harmonie Herald* など。オウエン関係では、*Owenism and the Working Class, Six Pamphlets and Four Broad-sides, 1821-1834*, 1972. Walter Brookfield Hendrickson, *David Dale Owen, Pioneer Geologist of the Middle West*, 1943. William Maclure, *Observations on the Geology of the United States of America, 1817*, reprint 1962. Caroline Dale Owen Baldwin, *David Dale of Stewarton, Etcetra*, 1973. Clifford Nelson, *Lines Written at New Harmony and other Poems*, 1968. Clarence P. and Ruth P. Wolfe, *The Story of New Harmony, 1814-1970*, 1970. Don Blair, *The New Harmony Story*. など。

内していただく。彼は Historic New Harmony, Inc. の会長, New Harmony Memorial Commission の副議長で、村の史蹟保存計画及び新建築計画の指導をしている人。村の史蹟は、東西3ブロック、南北6ブロックの整然たる区画の中にほとんどが含まれてしまうので、徒歩で十分廻れる広さである。

4

現在の村の主な史蹟は、年代順にすると次のようなものがある。

BARRETT GATEHOUSE, 1814. 最も古い住居で、もとあった場所から移動、1960年に大きな家の一部に組み込まれた。今は Blaffer Trust の客用宿舎などに使われている。

THRALL OPERA HOUSE, 1814. 田舎の映画館程度の建物だが、もとは独身男性のための Harmonist Dormitory No. 4 として1823年完成、建築様式は興味深いものがあり、当時の建築方法を知る鍵を与えていると言われる。オウエンの時代にはダンス・ホールに、後アパートに使われ、1857年に、劇場となった。それより前1827年に、ウィリアム・オウエンにより Thespian Society という演劇クラブがつくられ、これは最初は教会で、後には Dormitory No. 1, 1855年からは Workingmen's Institute の中で、芝居をしたが、1855年に Dormitory No. 4 を購入、従来の経験を生かしてこれを劇場に改造したものである。当時この建物は Union Hall と呼ばれ、教会のバザーやスクェア・ダンスなどもここで行われた。この改造により、この劇場はバルコニーを含めて600~700席を有し、州では Metropolitan of Indianapolis につぐ大劇場となったのである。その後1888年に Opera House となり、1914年以後は車庫に使われていたのを、1964年にインディアナ州が買い取ってオペラ・ハウスに復元、現在では、インディアナ大学や州立大学の学生によって時に劇が上演されるほか、各種の会議場としても使用されている。

OLD FAUNTLEROY HOME, 1815, ミネルヴァ・ソサイエティ 発祥の地として有名で、白亜の優雅な2階建ての建物。ラップ派の Pfeil という家族の家で、オウエンの次女 Jane Dale Owen (1805~1890) が、天文学者、気象学者の Robert Henry Fauntleroy と結婚し、1840年以後住んだ。デイヴィッド・デイル・オウエン, Thomas Say (科学者、妻は芸術家), Lucy Sistaire Say

(彫刻家), Cornelius Teibout (発明家), Oliver Evans (教師) など多くの人もここに滞在している。Mary Emily Fauntleroy (1857~1952) がこれを相続し保存、1919年に Indiana Federation of Woman's Club が買い取り、内部を公開しているので、オウエンゆかりのかなり立派な家具(1827年にヴァージニア州から取り寄せたテーブルなど)や関係者の肖像画、ミネルヴァ・ソサイエティの資料などを見ることができる。

HARMONIST FORT-GRANARY, 1818. Laboratory の裏側にあり、厚い石壁で建てられたとりで兼倉庫で、屋根の上には弓に矢をつがえてひさまずいているインディアンを描いた風向計が取り付けられている。壁の窓は銃を使いやすくするよう設計されており、倉庫、工場、実験室、社交場などにも用いられた。

HARMONIST DORMITORY NUMBER TWO, 1822. ラップ時代の3階建て独身者寮で、オウエンの時代には印刷所や学校として用いられた。すなわちアメリカにおける最初の Pestalozzi 式学校の跡である。この教育においては、生徒は考えることを教えられ、実生活の中から、一人一人の子供の欲望と進歩に応じて教育が与えられ、教室と仕事場が結び付いていた。アメリカ最初の無料の公的学校とも言われる。建物は公開されていて、博物館として当時の印刷機械や風俗などを見ることができる。南壁には当時の日時計もある。

FREDERICK RAPP CARVING, 1822. ラップたちの教会は火事で焼けたが、その北の扉は残り、それは1913年に New Harmony School が建てられた時に西扉に用いられ、今に至っている。初めの教会は、ラップが夢の中で啓示を得たという計画によって設計され、彼はこの扉の上部には金色のバラと1822という数字を刻んだ。金色のバラは、予言者 Micah の "Unto thee shall come a golden rose……" という言葉から、キリストの再来と黄金時代の到来の予言を示すので、ラップ派はこれを彼らの象徴としている。

OWEN LABORATORY, 1859. オウエンの四男デイヴィッド・デイル・オウエンは、地質学、古生物学を専攻し、アメリカ最初の地質学者としてこの研究所を建てた。すなわち、これがアメリカ地質学の源泉である。3棟が続いた形になっており、中央の屋根は円錐形をなし、その頃ウォバッシュ河に多い鯉を型取った風向計が飾られている。自然科学研究普及の中心で、当初は研究所と講堂、後には住宅に変えられた。

INFORMATION CENTER, 1888. 木造の風変りな建物で、P. D. and E. 鉄道の停車場に建てられたものを、

1968年に現在の所に移動、Information Center として用いられている。

WORKINGMEN'S INSTITUTION, 1894. 歴史に名高い図書館、博物館、美術館で、当初は1838年にウィリアム・マグリューアの資金によって建てられ、1894年に Edward Murphy の寄附で今の建物ができた。中央に塔を持つ堅実な感じの2階建て、蔵書37,000点以上と言われ、ニュー・ハーモニー研究の中心である。マーフィは、これに極めて大きな貢献をし、その資金によって毎年優れた講義が行われ、1933年まで続いたという。またその資金で800席を有する Murphy Auditorium が附属建築として建てられた。

LABYRINTH, 1939. 広い庭の中に植込みによって同心円状の迷路がつくられ、中央には小さなあずまやがある。迷路に対する強い関心はギリシャ時代から見られるが、ラップたちはこれを知っており、人生の模索、選択、運命とその報いの象徴として、彼らの造園技術によってこれを造り、後世に残した。現在のものは、もとあった場所の近くに新しく復元したものである。

HARMONIST BURIAL GROUND. 果樹園に囲まれた静寂な芝生の空地が、ラップと共にこの村をつくった人たちの墓所である。彼らの半数近くは最初の一年で死んだとも言われ、疫病と闘いつつ流転と苦難の生涯を閉じたことであろう。この墓地には、一片の墓標も、一塊の土盛りもない。ラップ派は、その死においても平等を重視し、同一の服、同一の棺の中に眠り、一切の区別を捨て、墓地の中の個々の埋葬場所は長老のみ知っていたが、今はその記録もないと言う。

ROOFLESS CHURCH, 1960. 囲いのみあって全体を蓋う屋根のない教会。あらゆる宗派に解放されているのも珍しく、一隅に小さなパラシュート状の木ぶきの丸屋根があり、中にマリアと聖霊降下の像が安置してある。ケニス・デイル・オウエン夫人の寄附で造られ、丸屋根は Philip Johnson 設計、バラのつぼみを逆さにした形で、開いたバラの姿を日光の影で地上につくる。彫刻は Jacques Lipchitz, 二つの community 実験の記念碑であり、初期の community spirit の再生を願うもので、像は各人の信仰によってどのようにでも解釈されうと言う。

PAUL TILLICH PARK. 村の外れにあり、長年ニュー・ハーモニーに関心を寄せた著名な神学者 Tillich

(1886~1965) が寄贈した公園。中に彼の墓所および彼の言葉を刻んだ花崗岩がある。

以上の外にも、いくつかのラップ時代の家やオウエン家の墓所など、興味深いものが多い。案内のソワーツ氏は、建築中の Inn と Youth Hostelry にもわれわれを案内してくれた。その New Harmony Inn は、その後10月に完成、45室を有し、この地の見学に便宜を与えることとなった。

5

19日午後、ソワーツ氏の秘書 Loretta Glenn 女史の案内で Helen Elliott さんを訪問。彼女はオウエン派の James Elliott の子孫で、すでに相当の高齢であろうが、ニュー・ハーモニーの近代史を体現したような人で、知的な美しさに溢れ、広い家の中にはオウエンやライトの写真が飾られている。オウエンやミネルヴァ・ソサイエティについて語るうちに時はあつと言う間に過ぎ、21日の午前中も再度訪れる結果となった。彼女は、オウエンの書簡が日本にいくつかあることに強い興味を示し、そのコピーをぜひ集めたいとのことなので、とりあえず塾図書館と一橋大学外池文庫を紹介しておいた。

ニュー・ハーモニーがアメリカにおける女性解放思想の源泉の地であることは、比較的知られている。旧来の結婚制度を批判したオウエンが Mary Wollstonecraft を尊敬していたというばかりでなく、長男のデイル・オウエンとフランク・ライトは、アメリカにおける女性解放運動の基礎をつくった。スコットランド出身のライトは、23歳の時自由の地と考へてアメリカへ渡り、人類の救済、特に女性のために献身するが、ラップ派とその理想に関心を持ち、ニュー・ハーモニーに来てオウエン主義の影響を受け、*New Harmony Gazette* の編集を助け、1825年に、研究と討論のために Female Social Society という女性の会を組織した。(8)彼女の影響を受け、また父の理想を受けついでデイル・オウエンは、旧来の無意味な結婚式を批判して契約結婚を実践し、州議会議員および上院議員として女性の法的地位向上に努力した。こうした人物が活躍したニュー・ハーモニーにおいては、女性の地位は例外的に高い。また環境も文化的で、オウエンの次女ジェイン・デイル・オウエンが嫁いだフォントウラロイ家には、

注(7) 拙訳「メアリ・ウルストンクラフトの思い出」, 1970, 解説228ページ参照。

(8) Ross F. Lockridge, *The Old Fauntleroy Home*, 1939, p. 121.

オウエン家の三兄弟がよく集って、シェイクスピアを読み、教育、哲学、宗教、地質学を論じ、作曲を聴かせ、そうした中で、ジェインの4人の子供が成長する。そしてロバート・デイル・オウエンが1853年に駐ナポリ大使となった時、オウエン一族の子供たちと共にジェインの子供たちもヨーロッパへ行った。彼らのうち次女の Constance Owen Fauntleroy がミネルヴァ・ソサイエティの設立者で、ヨーロッパで教育を受けたのち、帰国し、友人と共にフォントゥラロイ・ホウムにおいて、単なる社交団体以上の永続的な組織を提唱、この家に住む叔父ロバート・デイル・オウエンが憲章を書き、ここに成文憲章と付則を持ったアメリカ最初の女性クラブが創立されたのである。

その目的は、“自己開発と知的教養のためにニュー・ハーモニイの若い女性によって設立される”と宣言されている。この叔父は、1850～51年に書かれたインディアナ州憲法の起草者の一人だから、憲章を書くには適任だった。コンスタンスは会長となり、副会長、書記も選ばれ、会の名はローマ神話の知恵の女神からつけられ、“Sapientia Gloria Corona Est” (知こそ栄光の冠) がモットウとなり、その略語 SGCE を金字で並べ十字の月桂樹をあしらったものがバッジと定められた。集まった会員は27名、当時の水準からすれば、いずれも教育程度の高い人たちで、真面目な計画を立て、詩、評論、小説などを書き、週に一度集まり、討論を重ね、優れたものを *The Advertiser* に発表した。また“教育はわれわれを幸福にするか？”“temper と affection のいずれが制御しがたいか？”“戦争と奴隷制の、どちらがより大きな害悪か？”“女性は知的に男性と平等か？”“事実と想像のいずれが知的快楽に貢献するか？”などの討論テーマが選ばれ、二派に分れて論争を試みている。会は4年間続いたが、南北戦争の混乱によって、1862年10月休会を決め、1863年9月28日までの記録を残して、消滅した。会員の多くは、雄弁家、著述家、音楽家、芸術家、教師、図書館員、宗教指導者、女性解放の指導者など、知的な職業についたという。

この会に大きな貢献をしたのは、コンスタンスのいとこ Mary Emily Fauntleroy (1857～1952)であった。彼女の母もまたこの会の設立時からの会員で、共にフ

ォントゥラロイ・ホウムに長く生活していた。彼女は、この会の写真や資料を整理し、オウエンとフォントゥラロイ家の家具調度などを保存し、同家のミネルヴァの間で、今日われわれがこれらを見ることを可能ならしめた。彼女の努力がなければ、この会の歴史は今日のように知られなかったであろう。またこの会は、その会員を通じて General Federation of Women's Clubs などの組織にも貢献したので、まさにニュー・ハーモニイは、アメリカ女性解放の淵源の一つと讃えられるにふさわしい。

6

翌20日は、朝から Workingmen's Institute へ。幸いにも“詩人の家”の近所の子供たちが5歳の娘と遊んでくれるというので、妻と2人で1日中ここにもることができた。親から言われたのかどうかかわからぬが、村人たちが陰に陽にわれわれの仕事に便宜をはかってくれるので誠にありがたい。この建物は1階が図書館で、左手が書庫、右手が閲覧室、奥の小部屋が archives になっている。ニュー・ハーモニイ関係の書物が多いのはもちろんだが、ついでには、オウエンの玄孫 Caroline Dale-Owen Baldwin 女史が1970年にオウエン生誕200年行事組織のために来日した折りの毎日新聞の記事が未だにはってあり、また館員の女性は、日本のものはこれだけあると言って、「ロバート・オウエン論集」や五島茂氏の論文「オウエン系図」などを示してくれた。異国でめぐり会う自分の論文を含めて、誠に懐かしいものばかりである。来客名簿にも、五島茂、越村信三郎などの署名が見られる。私も旧著「オウエン」の一本を呈し、蔵書中に加えるよう依頼した。

Archives では、まず *The New Harmony Gazette* に目を通す。もちろん今はリプリント版で日本でも読めるが、原物は珍本中の珍本であり、またこの場所で読む感じは特別なものがある。オウエン一族およびオウエン主義者たちの資料も多く、厚さ3cmにも及ぶ Josiah Warren のノウト・ブックなどは、ここでなければ見られない。ミネルヴァ・ソサイエティに関しては、憲章、付則の現物、1859年9月20日から1863

注(9) “これより以前にニュー・ハーモニイや他の場所に共通の目的をもって集まり、この意味で結社をつくった女性のグループがあったことは疑い得ない。しかし、女性のために結社をつくるという理念を明白なまた機能的な形式に具体化し、堅実で持続的な制度をつくり上げたことが、ミネルヴァ・ソサイエティの独自の価値である。” *Ibid.*, p. 129.

(10) *Synopsis of the Minutes of the Minerva Society of New Harmony, Indiana*, edited by Rachel Fauntleroy, 1904, p. 4. Cf., Ross F. Lockridge, *op. cit.*, p. 176.

年9月28日に至る議事録、会員についての資料などが、New Harmony State Memorial Collection の中に含まれている。この Collection は、かつてフォントゥラロイ家にあった書物やメアリ・フォントゥラロイが集めた書類、新聞などからなり、現在はインディアナ州の所有となっている。そのほかにもいくつかの collection があるが、残念なことには総合図書目録がなくカードだけなので、その全貌がわからぬのは惜しい。2階は右手が博物館で、考古学上の遺物からラップ時代、オウエン時代の資料が展示されており、フランク・ライトのピアノや初期の消火ポンプなどが目につく。2階の左手は画廊で、1887年と95年の2回にわたってエドワード・マーフィが寄贈した絵が飾られ、また彼の資金で開かれてきた絵画クラスの生徒によるこの地方の歴史画、風景画が書かれている。中央階段には、ラップがオウエンにニュー・ハーモニーを譲渡し署名している大きな絵があって、この地の歴史を示し興味深い。(ただし、オウエンとラップはニュー・ハーモニーでは会っていないだろう。)

司書からおみやげに頂戴した立派な装訂の *History of the New Harmony Working Men's Institute, 1838-1927, compiled from original documents, by Thomas James de la Hunt, 1927* によれば、創立者ウィリアム・マクリュアは、“大学や公立諸学校は、学問を少数の金持だけのものとし、それによって教育のない大衆を抑圧しようといつも努力してきた。このような誤った偏狭な政策のゆえに、科学教育や普通教育からこれまで排除されてきた人たちに、科学と芸術の一般的知識を伝える”ことを重要と考え、労働者階級の教育と発展が、彼の生涯の目的であった (p. 1)。以後、労働階級の運動とどれだけ結びついているかは疑問であるが、この労働者会館が、一般の知識普及と教育に大きな貢献を続けたことは言うまでもない。だが、その大きな歴史的役割に比すると現状はいささかお粗末で、資料はよく整理されておらず、文書の複写に制限があるなど、機能はあまりよくなかった。来客名簿に記された研究テーマを見ると、ウォーレンやライトなどに対する関心が特に強まってきたことがうかがわれ、将来ここが所蔵する資料の価値は、世界的に大きく評価されると思われるので、労働者会館の整備と発展を強く望みたい。

注(1) インディアナ大学とオウエン一族の関係は深く、リチャード・オウエンは1863年から79年まで同大学の自然哲学、化学、地質学の教授、ロバート・デイル・オウエンは1838~46年、1850~52年に理事として大学に貢献し、最も古い建物は Owen Hall と名付けられている。Robert Owen's American Legacy, pp. 25-6.

21日、Elliott 女史を再訪し、Glenn 夫人と食事を共にしたのち、厚遇を謝して“詩人の家”を出発、インディアナ州立大学の Donald E. Pitzer 教授がわれわれを待ちうけているとのことで、30マイルほど離れた Evansville に車を飛ばす。この大学はインディアナ大学とは別の新しい州立大学で、“Utopia”と銘打った研究室で、われわれを迎えたピッツァ氏は、ユートウピアの住人らしく明るい笑顔でユートウピアを論じ、最近ヨーロッパで撮ってきたばかりの、Württemberg および New Lanark の多数のスライドを見せてくれた。ラップの生まれ故郷の写真は、私には初めて見るものである。そのあとでしばし雑談——一体ニュー・ハーモニーで真にオウエンのものと言えるものは何か? …それは意外と少ない。建物はラップのもの、教育はマクリュアだし、彼の協同組合運動も社会主義もこの地に根付いてはいない。彼が本当に残したものは、彼の idea, spirit, そして *The New Harmony Gazette* だろう。——アメリカで最初の無料の公立学校はニュー・ハーモニーが最初か? …それは疑問がある。とかく地元の人には自分の所の歴史だけを強調するので——などなど。夕刻“ユートウピア”室を辞し、図書館の Indiana Room や Rare Book Room を見せてもらう。大学自体が新しいので、特に目立つコレクションはない。

そこで翌22日は、Bloomington のインディアナ大学図書館へ。ここは素晴らしい新建築で、中西部大学の偉容の一角を示して、300万以上の蔵書を誇り、稀観書の Lilly Library を有している。オウエン関係の蔵書もさすがに相当なもので、アメリカにおけるオウエン研究の一拠点⁽¹⁾と言えるだろう。時間の都合で細かい検索には他日を期し、かつてフレデリック・ラップが州都の選定と計画に活躍した Indianapolis へ一泊。この州立図書館の Indiana Division にもかなりニュー・ハーモニー関係の資料が集められているし、また同じ建物の中に、1830年創立という Indiana Historical Society があり、たまたまオウエンの資料を展示中であった。アメリカにおいてオウエンを描いた唯一の肖像だという John Cranch の絵 (1845年にワシントンで書かれ

た。Long Island Historical Society 所蔵) を中心に、*A New View of Society* の最初のアメリカ版、*Manifesto of Robert Owen*, 1841. *An Address to the Socialists on the Present Position of the Rational System of Society*, 1841. *Robert Owen's Millennial Gazette*. *The Co-operative Magazine*, いくつかの手紙の copy などが並べられているので、Tom Rumer 氏に会ってオウエン研究の現況を聞く。この会と Indiana Historical Bureau の多数の出版物の中には、*David Dale Owen, Pioneer Geologist of the Middle West*, by Walter Brookfield Hendrickson, 1943. *The Diaries of Donald Macdonald, 1824-1826*, with an introduction by Caroline Dale Snedeker, 1942, reprint 1973. *To Holland and to New Harmony, Robert Dale Owen's Travel Journal, 1825-1826*, ed. by Josephine M. Elliott, 1969. *Diary of William Owen from November 10, 1824 to April 20, 1825*, edited by Joel W. Hiatt, 1906, reprint 1973. 及び前述の *Robert Owen's American Legacy* など貴重なものがある。

8

23日、インディアナポリスに別れを告げ、Cincinnati, Columbus, Wheeling, Winchester と北廻りの道でヴァージニアへ向かう。かつて Charlottesville 近郊に生まれた探検家 George Rogers Clark が独立戦争中ヴァージニアの権益のためにインディアナに進軍し、またラップ派が新たな共同体建設のために移動したであろう苦難の地帯を、今は快適なハイウェイに乗り、途中の見物をしながら反対方向に走って3日で通り抜けてしまった。オウエンがペンシルヴェニアのイコノミイから初めてニュー・ハーモニーにたどりついた時は1カ月以上もかかったと言われるのに、時速60マイルというスピードは、先人の苦難の歩みを感じて忘れさせてしまう。それにしてもラップは、かくも遠い道を何のために荒野の只中へやってきたのか？ そしてニュー・ハーモニーを引き継いだオウエンとオウエン主義者たちは、一体何を残したのか？

ニュー・ハーモニーの現状は、建築物、史跡としてはラップ派のものが圧倒的に多い。キリスト再来の暁にはすぐにもパレスチナへ旅立とうとしていた彼らが、

なぜ今日にも残る堅固な建築を行なったかは疑問だが、それほど彼らの技術水準が高かったのであろう。また、それを発揮させる彼らの宗教的情熱が強かったのであろう。それを引き継いだオウエンは、技術者を選んで入村させることをせず、それが共産主義失敗の一原因ともなるのだが、そのかわりに、文化を導入し教育を普及する人材を得ることに成功した。たとえば、帰宅後に送られてきた五島茂氏の近著「ロバート・オウエン」には、次のように記されている。

“1826年1月24日「知識の宝船」(The Boatload of Knowledge) 'philanthropist' 号着。26日上陸。優秀な自然科学者一行27名。Robert Dale Owen, William Maclure, Thomas Say, Charles-Alexandre Lesueur, Fretageot 等。重大な頭脳流入。やがて米国文化への最大の寄与となる。”

彼らによって、共産主義の実験は失敗したが、進歩的思想と高い文化が維持された。今日村で誇らしげに言われるような、アメリカ最初の男女共学無料の公的學校、最初の幼稚園、最初の幼児學校、職業學校、無料図書館、憲章を持った女性クラブ、民間劇団、地質学研究発祥の地……ということが、例え多少の留保が必要であるとしても、ニュー・イングランドやヴァージニアなどのヨーロッパ文化の吸収口から遠く離れた辺境の地の一隅で、アメリカ文化の一源泉が吹き出したということは誠に驚異と言うほかはない。その意味でニュー・ハーモニーは、単にラップとオウエンの共産主義の実験場と言うばかりでなく、困難な状況のもとで人間の可能性を示す実験場でもあった。そして communism は敗れたが community は残り、人間の理想と情熱がどれほどのものをなしうるかということ、ニュー・ハーモニーの歴史は長く人びとに語り続けるであろう。

帰宅後暫くしてから、インディアナ州立大学のピッツァ学部長より、Historic Communal Societies Conference を11月15, 16の両日ニュー・ハーモニーで開くという招待状をいただいた。イリノイ州の Illinois Parks and Memorials; ミズウリ州の Bethel German Communal Colony; ペンシルヴェニア州の Old Economy; ケンタッキ州の Shakertown などの代表と共にピッツァ氏が準備したもので、歴史的な共同体を保存し生かすための、相互連絡、協力の方法を探るのがこの会の

注(12) 五島茂「ロバート・オウエン」, 1973年, 239ページ。この“Philanthropist”については、前記のロバート・デイル・オウエンの旅日記に詳しい。

目的である。氏は、ここ10年の間に共同体に対する関心がかつてない程高まったことを指摘し、若い世代のために共同体を復活し、古い民芸を再評価し、建築や資料を保存する必要を力説された。私は所用でこれに参加しえなかったが、かかる会議がニュー・ハーモニーで開かれることは大きな意義があり、この会議は過去の歴史に対してのみならず、未来に対しても大きな貢献をするであろうと祝意を表した。そして、共同体に対する関心はアメリカのみならず、日本においても近年急速に高まっており、かかる会議は近い将来国際的な規模で開かれるべきであるとの要望も書き添えておいた。遙かに歴史を流れるウォバッシン河のほとりに思いをよせ、再度の訪問を念じつつ……。

— 1月15日, Charlottesville にて —

〔付記〕

ピッツァ氏からその後送られてきた便りによると、The Historical Communal Societies Conference には14の歴史的共同体から80人以上の人が集まった。第2回会議は、本年11月6, 7, 8日に、ケンタッキ州のShakertown (Pleasant Hill) で開かれる。この会議では、歴史的共同体の間の連絡を保ち、共同資金の設立、出版活動などを促進する機関の必要性が認識され、インディアナ州立大学には資料の収集のために Institute for Communal Studies がつくられる。

またニュー・ハーモニーにおいては、Documents and Memorabilia Committee of the New Harmony Memorial Commission が、ニュー・ハーモニー関係の資料収集を計画している。労働者会館に隣接したマーフィ講堂などいくつかの古い建物も修復され、5月16, 17日には、インディアナ州の後援により、スロー・オペラ・ハウスで American Bicentennial Symposium が開かれる

という。

また最近 *The American Utopian Adventure* というリプリントのシリーズがフィラデルフィアの Porcupine Press から出版され、ニュー・ハーモニーに関しては次の書が含まれている。

(Series One) Paul Brown, *Twelve Months in New Harmony, presenting a faithful account of the principal occurrences which have taken place there within that period: interspersed with remarks*, Cincinnati, 1827. John S. Duss, *The Harmonists, a personal history*, Harrisburg, 1943. Alice J.G. Perkins & Theresa Wolfson, *Frances Wright: Free Enquirer, the study of a temperament*, New York, 1939.

(Series Two) *New Harmony as seen by Participants and Travellers*, Part One, letters of William Pelham written in 1825 and 1826, edited by C.C. Pelham, Part Two, diary and recollections of Victor Colin Duclos, transcribed by Nora C. Fretageot; Part Three, report of a visit to New Harmony by Karl Bernhard, Duke of Saxe-Weimar-Eisenach, illustrated with contemporary sketches by Charles Alexandre Lesueur. Indianapolis, 1916.

ニュー・ハーモニーに関する日本語の文献としては、越村信三郎「ロバート・オーエンの夢と現実——ニュー・ハーモニー物語のひとつま」(『経済評論』1964年4月号, ロバート・オウエン協会編「ロバート・オウエン論集」家の光協会, 1971年所収), 越村信三郎「アメリカにおけるキリスト教共同村——ニュー・ハーモニー物語のひとつま」(『経済系』61号, 1964年7月), 五島茂「ロバート・オウエン」家の光協会, 1973年などがある。

(4月20日)

(経済学部教授)